

日本近世窯業史(ガラス工業)口語版

(株)機能性ガラス研究所 藤田 卓・編修



第八回

(2)大阪地方

大阪が日本のガラス工業で重要な地位に位置していることは、これまでも説明しているが、大阪及び周辺地域、東京近辺、福岡近辺地域は三大ガラス生産地域として継続が予想される。現に大阪市内及びその付近では壘、燈用品、飲食器、光珠、雑器の製造においては国内では抜きんでていた。

島田孫市によって板ガラスが工業的な方法で生産される。次いでガラス業界で大きな組織と称せられた東洋硝子株式会社が出現し、更に尼崎において旭硝子株式会社が生まれるに及び、明治維新の前からの懸案であった板ガラスの本格的な製造への道筋が出来た。次いで厚板ガラスの製造も同じく成功する。

このようにして全体を見るとガラス製造業は東京で生まれて大阪で育成され、その後は九州北部へと展開したと言える。大阪がこの業界で伸びたのは大阪が地理的に貿易面で優位となる地理的な立地であったことも関係していた。中国、オランダ領、英国領のアジア諸国、オセアニア等から欧州に至り、英国市場に至る大阪経由の商品の勢いは極めて大きいものであった。

① 壘類

褐色壘の製造工場は明治26年に元大阪麦酒株式会社が製壘部を北区西堀川に設けて、初めて自社用麦酒壘の製造を行なった頃に始まる。当時は供給先がないことから、やむを得ず自営で対応することになった。その後、明治27～28年に畑喜十郎が工場を天満に設けて麦酒壘の製造を進めた。熊勢六三郎、山本為蔵、上杉正八等が相次いで参入した。次に清酒及びラムネ用青色壘は、工場を新町に置いた木原茂平によって明治初年には始めていた。このように小壘類の製造は明治初年には行われたが、木村新兵衛、村尾福松、山瀬十吉等が知られる。その後、大正時代における大阪でのガラス業者の中で壘類の製造に関わる者として次の斯業者を列举する。

* 石原休次郎 東区南本町 1-14(小壘)

* 木村寅吉 北区北同心町 2-270 (小壘)

- * 山本松之助 北区金屋町 1-90 (小壘)
- * 辻川平吉 東区北国分町 1137 (小壘)
- * 徳永芳治郎 北区興力町 2 番外 10(大壘)
- * 山本爲蔵 北区興力町 2-480 (大壘)
- * 藤井信太郎 北区天満橋筋 6-14(薬壘)
- * 河合忠蔵 東区玉造町(牛乳壘)
- * 村上伊之助 北区天満橋筋西 2-204 (小壘)
- * 松本桑次郎 北区北野兎我野町 862(小壘)
- * 篠原卯三郎 東成郡中本村字中道(小壘)
- * 月岡幸次郎 南区難波西圓手町 4625 (小壘)
- * 松田松次郎 北区北同心町 2-359(牛乳壘・化粧品壘)
- * 高田福松 北区北同心町 2-371(小壘)
- * 木村保造 北区北同心町 2-278(斤壘・薬壘)
- * 関松之助 北区我野町(小壘)
- * 西村實三郎 北区本庄葉村町 1083(小壘)
- * 奥田寅吉 西成郡豊崎村大字南長柄(化粧品壘・インキ壘)
- * 上村由太郎 北区天神橋筋 4-137(小壘)
- * 高橋末松 北区東野田町 59(小壘)
- * 高田竹次郎 北区興力町 1-427(化粧品壘)
- * 今井喜三郎 東成郡中本字中道柄(小壘)
- * 合資会社木原硝子製造所 北区興力町 1-640(大壘)
- * 池永實造 西成郡豊崎村字本庄中野(ラムネ壘・清酒壘)
- * 白山鶴松 北区相生町 150(小壘)
- * 桐元吉 西成郡豊崎村字本庄(化粧品壘)
- * 鹽野堅治 東区上本町 9-258(小壘)
- * 三好小太郎 北区北同心町 2-306(小壘)
- * 原浅吉 東区高津生玉町(小壘)
- * 小川鶴吉 東成郡北百濟村字桑津新家(小壘)
- * 柿谷伊之助 北区天神橋筋東 1-335(小壘)
- * 村尾福松 東成郡鯉江村字新喜多(小壘)
- * 池上宇吉 南区難波稻荷町 2-949(小壘)

- * 富田製硝合資会社 北区新喜多町番外 26(大壘)
- * 青山虎之助 南区今宮西關谷町(小壘)
- * 森川米造 南区今宮船出町 828(大壘)
- * 金谷聰一 北区天満橋筋西 1-324(小壘)
- * 大日本麦酒会社大阪支店 三島郡吹田町(麦酒壘)
- * 四ッ谷四郎 北区北同心町 1-381(大壘)
- * 松浦松 西成郡豊崎村字川崎(斤壘・薬壘)
- * 篠田静太郎 北区興力町 2-448(化粧品壘)
- * 平谷久次郎 北区東野出町 499(小壘)
- * 多田政七 北区芝田町 177(薬壘・密柑水壘)
- * 小西新太郎 北区天満橋筋西 1-328(薬壘)
- * 合資会社大阪製壘所 北区西野田東ノ町 1038(大壘)
- * 谷本竹次郎 北区北同心町 2-376
- * 塚本藤三郎 西区西九條上ノ町 107
- * 富田芳五郎 東成郡鯉江村字蒲生(大壘)
- * 牧村三郎 北区天神橋筋西 2-101
- * 鈴木徳次郎 南区難波圓手町 102
- * 納カメ 北区北野大融寺町 1414
- * 森儀平 堺市熊野町東 2 丁(酒壘)
- * 鷗井常蔵 北区天神橋筋西 2-227(小壘)
- * 加藤豹次郎 北区芝田町 177(大壘)
- * 高野安吉 西成郡豊崎村字南濱
- * 宮島喜十郎 東成郡鯉江村字新喜多(青色壘)
- * 栗本安太郎 西区西野田上ノ町(大壘)
- * 萩原安太郎 北区興力町 2 丁目(青色壘)
- * 桑田市松 北区東梅ヶ枝町 908(小壘)
- * 京本善太郎 西区九條 3 番道路 3-612(化粧品壘)
- * 平田猪之助 北区興力町 2-412
- * 泉小文次 東成郡鯉江村字新喜多
- * 萩原嘉市 北区天満橋筋西 3-199(小壘)
- * 藤川治平 南区上本町 2-87

- * 宮内仁佐吉 北区芝田町 78
- * 南山濱吉 東成郡鯉江村字新喜多
- * 松森長右衛門 東成郡鯉江村字新喜多
- * 松村幸三郎 北区芝田町 177
- * 関谷栄作 北区野崎町 613
- * 松野兵吉 南区難波稻荷町 2-935
- * 瀬社家清三郎 東区天王寺勝山通 1 丁目
- * 平松文次郎 北区東梅ヶ枝町 395

このうち、木原硝子製造所、富田製硝合資会社、森川米造、大阪製壘所、宮田芳五郎、栗本安太郎、萩原安太郎、山本為三、徳永芳次郎、藤井信太郎、四ツ谷四郎、宮島喜十郎等は大壘製造業者の大なるものとし、月岡幸次郎、辻川平吉、山本松之助、石原休次郎、木村寅吉、篠原卯三郎、松田松次郎、高田福松、山瀬十吉、高橋末松、上村由太郎、西村實三郎、三好駒太郎、京本善太郎等は、小壘製造業者の中で規模が大である。また会社規模の工場の中で合資会社木原硝子製造所は、木原茂平の経営により、資本金三萬圓を三好鹿蔵が出資責任者となっている。富田製硝合資会社は資本金壹萬伍千圓を富田藤次郎が出資している。合資会社大阪製壘所は上杉正八が東洋硝子株式会社を退いて設立したものであり、資本金八萬圓であった。

大日本麦酒株式会社吹田工場製壘部は元大阪麦酒株式会社時代に創設された。同社創立当時の計画は輸入麦酒の空壘だけで再利用することを想定していたが、麦酒の醸造能力の増進と共に麦酒壘も需要増が進んでいった。

当時、国内での製壘工場は東京で田中榮八郎が行っている程度であった。

そのような中で麦酒製造会社自らが製壘に当たり、明治 26 年 8 月に大阪市北区西堀川に地所家屋を購入して工場に充て、同年 11 月に製壘業を開始した。ここで支配人として生田秀が指揮し、主任として設計に関わった倭田平七は熔窯は小形半瓦斯式槽窯一基とし、一年で 43 万 2 千本の生産計画であったが、麦酒の販売高はそれを大きく上回った。

そこで製壘業務を拡張するために新工場を府下海老江に建設し、半瓦斯式槽窯 2 基を据付けたが、その後 淀川改修工事のため新工場撤廃止むなしとなる。

明治 32 年 6 月に三島郡吹田村の醸造工場敷地のうち 4500 坪に製壘所に移設を決め、半瓦斯式槽窯二基を新築し、翌年には更に二基増設して製造に努めた。明治 39 年の組織改革で大日本麦酒会社になり製壘部も拡張されると、従来の半瓦斯式を廃してシーメンス、リジェネラティブ式槽窯三基を築き、職工 350 人で年間 1000 万本の生産能力を有すようになった。高橋書一郎が米国から帰国し技師になると彼を中心とし、大正二年に製瓶機械を導入し生産開始すると共に窯を改築して、生産能力を大きく伸ばすことになった。この部門の主任技術者として札幌工場製壘部を任されていた吉見幹之丞が担当する時期もあったが、彼が札幌に戻ると、高橋書一郎、亀啓三郎等が指揮対応していた。

このように大阪地方での製壘業の推進は事業者がいずれも機械化で成果を上げた点が大きいの。機械製壘を実地作業に応用したということでは大阪市外の大仁の東洋硝子株式会社があった。この会社は一度解散すると兵庫県尼崎に機械製壘を主目的とする大物製壘合名会社を設立した。明治 42 年 8 月に神戸の英商トーマス、ケルショー他二名の出資金八萬円で設立し、東洋硝子に於いて機械製壘の実績のあったシッシェル、ディッセルの発明の製壘機械 10 台を備え、ディッセルを支配人兼技師として運営に当たる。製品はウイルキンソン炭酸泉株式会社に納入開始したが、経営的に芳しくなく明治 43 年にディッセルが退社し大物製壘は解散した。このような中で大日本麦酒株式会社吹田工場製壘部が吸収する動きとなった。ここは大物製壘解散後、その機械を購入し更に改良を加えて十分に使えるレベルとした。

その他には北区天満の徳永芳次郎は独自の発明による製壘機普及のため、大阪製壘所及び山本為蔵等に技術指導していた。徳永芳次郎の特許による製壘吹成装置は用法が簡単で効率よく高く評価されたものであった。

② 燈用品類

燈用品中でも洋燈用火舎は最も早くから製造が試みられていたものであり、慶応の頃には、既に伊藤庄三郎、久米長兵衛等によって製造され、次いで渡辺貞助、小島四郎兵衛、駒屋新七、高田源四郎、玉屋平四郎、阿波屋彌七、大和屋安兵衛、金谷惣兵衛、真田壽兵衛のような和吹硝子業者も最初の頃は油壺、火舎類の製造を主な業務としていたが、明治 10 年頃において、これらに熟達したものとして大塚治兵衛、和田源次郎がいた。

石笠については明治 21 年頃赤松彌兵衛、近山太兵衛等が資本金二萬円を以て設立した日本石笠合資会社及び明治 22 年 5 月駒井庄太郎、岩井勝平等の輸出商が資本金一萬二千円を以て創設した製硝合資会社等により隆盛となった。しかし日本石笠会社は業務不振のため解散し、松本磯吉が譲り受けた。その後、磯吉の子である松本久太郎と金田龍蔵、津川敏樹の共同経営になった。更には松本久太郎の弟である松尾辰之助が継承して大阪石笠製造所と称した。

駒井庄太郎は当初、密かに石笠製造を企てるが乳白色原料を探ることに苦心していた。六吋石笠を何とか試作したものの目標には至らなかった。輸入商を介して原材料ノウハウを探ったが中々情報が得られなかった。そのような中でドイツ商サンダーは庄太郎の苦心を知り、南米産の氷晶石が乳白地のガラス製造に適していることを教え、材料供給も約束した。このようなことが明確になり業界では騒ぎになった。製硝合資会社設立する時期になると南米からの輸入原料が高騰するという事態になった。しかしその後、蛍石が従来材に代替えできることが分かり問題解決につながるようになった。

大阪における洋燈用油壺、火舎、各種笠類等の燈用品製造工場は次の通りである。

- * 北内役次郎 北区東寺町一ノ番外 13
- * 和田栄次郎 南区今宮船出町 651
- * 島田孫一 西成郡鷺洲村字海老江
- * 上田富吉 東成郡中本町大字中道
- * 製硝合資会社 北区興力町 1-639
- * 和田永吉 南区難波鹽草町
- * 木村卯兵衛 西成郡豊崎村字本庄
- * 吉田岩吉 北区北同心町 2-269
- * 清水鐵三郎 北区北野兎我野町 862
- * 西脇 房 南区今宮船出町 1173
- * 鈴木福太郎 南区難波稻荷町一丁目
- * 小山栄太郎 南区逢坂下ノ町
- * 森下亀吉 南区今宮西關谷町
- * 岩津源三郎 南区木津敷津町 1016
- * 津田種松 西区本田三番町 239

- * 西座八十松 南区今宮貝柄町 338
- * 荒瀬定吉 西区本田 1-203
- * 小川浅太郎 北区北野兔我野町 821
- * 三村安太郎 北区天神橋筋西二丁目
- * 清水利三郎 西成郡豊崎村字本庄
- * 高岡福三郎 西成郡豊崎村字川崎
- * 光井篤一 南区難波桜川町四丁目
- * 亀井菊太郎 北区南同心 1-462
- * 福永權七 北区天神橋筋西 2-89
- * 寺村民藏 南区難波桜川町二丁目
- * 石木硝子製造所 北区南同心町 1
- * 桑田松之助 北区興力町 1-427
- * 篠 巳之助 南区今宮船出町 801
- * 長尾末吉 西区本田三番町 100
- * 今澤芳太郎 南区今宮西關谷町
- * 宮川彦一郎 南区木津敷津町 471
- * 小林クニ 南区今宮船出町 801
- * 寺坂和吉 南区難波稻荷町 2-927
- * 宮崎常七 北区本庄西權現町
- * 黒田友三郎 北区東野田町 459
- * 鈴木徳次郎 南区難波圓手町 1021
- * 小澤源五郎 西成郡豊崎村字本庄
- * 雲田 卓 西区本田町通り 3-42
- * 松田寅太郎 西成郡豊崎村南長柄
- * 松本清一郎 北区本庄横道町番外 135
- * 成瀬 種 西区岩崎町 80
- * 片岡製硝合資会社 北区東野田町 25
- * 松尾辰之助 北区南同心二ノ番外四
- * 桐 常三郎 北区西梅が枝町 123

これらの中でも北内役次郎の臺洋燈、島田孫市、製硝合資会社、和田栄吉、松尾辰之助のシェード類、西座八十松の豆洋燈、木村卯兵衛、吉田岩吉、小山栄太郎、寺村民蔵、桐常三郎の火舎類は有名である。陶器配合洋燈について工夫して好評を得た小野助十郎がいた。竹火舎の内製については吉田岩吉も知られる。大阪において最大の電球製造業者は大阪電球株式会社であった。この会社は西成郡鷺洲町大仁にあり、井上守の個人工場で運営していたが、明治30年に株式会社に改めて資本金三拾萬圓とし、さらには百萬圓し、社長渡辺修、内村謹爾社務で運営していた。同社は当初、東京市の斎藤喜三郎が管轄する大阪分工場よりバルブの供給を受けたが、明治35年3月に至り硝子工場を設けて蓼沼芳四郎を主任とした。芳四郎は明治29年5月に斎藤喜三郎が北区興力町に分工場を設立した際に支配人として来阪していた。この分工場設立の目的は東京の帝国電球株式会社専務取締役川勝倉之助が当時、電光舎と称して堺筋に支店を開設していたが、ここにバルブを供給することであった。

その他に南区難波芦原町に河村春太郎の経営する日本電球製作所があった。南区難波圓手町の鈴木徳次郎よりバルブの供給を受けていたが電気業の発達著しい中で規模を大きくするべきと判断し株式組織に改めて日本電球株式会社とした。大阪での需要のある電燈球のうち、純粋な大阪製と東京電気株式会社製が市場を2分していた。

③ 食器雑貨類

食器雑器は工部省所轄の品川硝子製作所の職工が、同所の廃止に伴い伊藤契信の工場に入ると舶来吹及び壓搾製の技術が採用された。従来法の改良、生産性向上も進んだ。本品を製造する工場は次の通りである。

- * 島田孫一 西成郡鷺洲村字海老江
- * 製硝合資会社 北区興力町 1-639
- * 鈴木福太郎 南区難波稻荷町一丁目
- * 三好鹿蔵 南区西圓手町
- * 小山栄太郎 南区逢坂下ノ町
- * 上田一治 北区北同心町二丁目
- * 森下亀吉 南区今宮西關谷町
- * 福永勝平 北区北同心町 2-217

- * 三村安太郎 北区天神橋筋西二丁目
- * 長谷川合資会社 北区東梅ヶ枝町 923
- * 石本正二 北区南同心町 1-677
- * 神納庄次郎 南区難波東神田町 871
- * 森井七五三之助 東成郡中本村大字中道
- * 朝野劔次郎 北区末廣町二
- * 高田福松 北区北同心 1-371
- * 城野末吉 北区北野太融寺町
- * 西村實三郎 北区本庄葉村町 1083
- * 木村芳三郎 北区北同心町 2-318
- * 合名会社山瀬硝子製造所 北区南同心町 1-480
- * 益田熊太郎 東成郡鯉江村蒲生
- * 神戸政吉 南区天王寺々前町
- * 浅野 芳 南区内安堂寺町 2-40
- * 山田松三郎 南区木津敷津町 1278
- * 山田忠義 東成郡鯉江村字新喜多

前述のように舶来吹食器の製造工場として有名であるのは島田孫市であり、彼の考案による瓦斯及び石炭直火焼成を併用する坩堝炉 2 基を設置し、子の一郎を技術者として育て、新淀河畔の工場を運営させた。壓搾器については駒井庄太郎の製硝合資会社及び三好鹿蔵の三好硝子製造所の製品の評価が高い。島田孫市は明治 16 年に来阪し伊藤契信の工場に入るが翌年には独立する。彼の品川硝子製作所時代からの技術レベルは非常に高いものであった。

一方、島田孫市は板ガラス製造についても着目していた。欧米の状況視察も行っていたが、岩崎彌之助の次男である岩崎俊彌とも接触し共同事業について協議された。明治 40 年 1 月に資本金八十萬圓の大阪島田硝子製造合資会社が組織されている。孫市は海老江に大工場を新築しているが、従来の天神橋筋の工場は明治 41 年 10 月に資本金二拾萬圓を有する旭硝子合資会社として存続となり社長は岩崎俊彌、田村八二支配人、三角愛三技師長とした。大阪では重明舎を総販売店、東京銀座支店を設け関東方面への販路拡大に努めた。

しかし旭硝子が大正二年に新工場を設立すると、天神橋筋の工場は解散し今村繁三が製造を引継ぎ、工場を東京の大崎町に移して事業を継続した。これを橘硝子製造所とした。島田孫市、旭硝子の技術は欧米製品に劣らないものであった。これら以外に篠巳之助、鈴木福次郎、神戸政吉、森下亀吉、福永勝平、長谷川合資会社、神納庄次郎、等が著名な食器雑器類製造者として知られる。

大正3年(1914)に第一次大戦が勃発すると欧州から特にアジア各国への輸出が途絶える。例えば護謨液受器(天然ゴム原液を受ける容器である)に関してはガラス製の場合、採取された液量を明確に把握できる。このようなガラス容器を供給するには日本というのは極めて有利な立場にあった。製硝合資会社は工場を挙げて本品を製造に注力した。その他、三好鹿蔵、徳永芳治郎をはじめとして当時の瓶及び食器製造業者のある部分は需要の急増に対応していたのである。

《解説》

ここでは壺類、燈用品類、食器雑器類が挙げられているが、まずは燈用品類に注目した。石木為次は1890年に石木硝子製造所を設立し、その後の大阪特殊硝子株式会社に継承されている。(石木硝子製造所に関しては、1950年に発行された「日本ガラス工業史」等の記述も踏まえて私が追記した。)

即ち、この業界で一定の先見の明のある企業家は事業を発展させて照明事業に注目し、そして継承され、反射鏡といった光学関係の事業に展開して行くことになった。

そして最後のところでは、第一次大戦の勃発という事態の中で、護謨液受器についての急な需要についての事例が挙げられている。汎用商品というのは世界のレベルに到達しておくことが先ずは必要である。今後説明して行く事例の中にも同様のケースが存在する。

市場が大きくなり、ワールドワイドに展開して行く中では、進めている商品のトレンド変化の先を間違いなく捉えているかが最も重要なのである。

2023.10.31 藤田卓 記

次回の**第九回** 「④理化学用品及び医療用品類」に続く